

# 市村弘正 「友情の点呼に答える声」

3年 文学国語  
『ちくま評論文選』

# 第一段落

「友情」という言葉の瀕死状態は、私たちの時代や社会のどのような事態を映し出しているのか？

# 20世紀とはどのような時代か？

- ・ 帝国主義の崩壊
- ・ 二度の世界戦争
- ・ イデオロギー対立
- ・ 植民地の独立
- ・ 民族間の紛争
- ・ 技術革新
- ・ 大量生産 大量消費
- ・ 大衆文化
- ・ 高度情報化社会
- ・ グローバル化 etc

P212 「収容所世界と友情」

# ガン病棟 (上)

ソルジェニーツィン / 小笠原豊樹訳

# ガン病棟 (下)

ソルジェニーツィン

# 収容所群島

2 ソルジェニーツィン 木村浩訳

# ソルジェニーツィン の アーカイブ 日記

ソルジェニーツィン

木村浩訳

新潮文庫

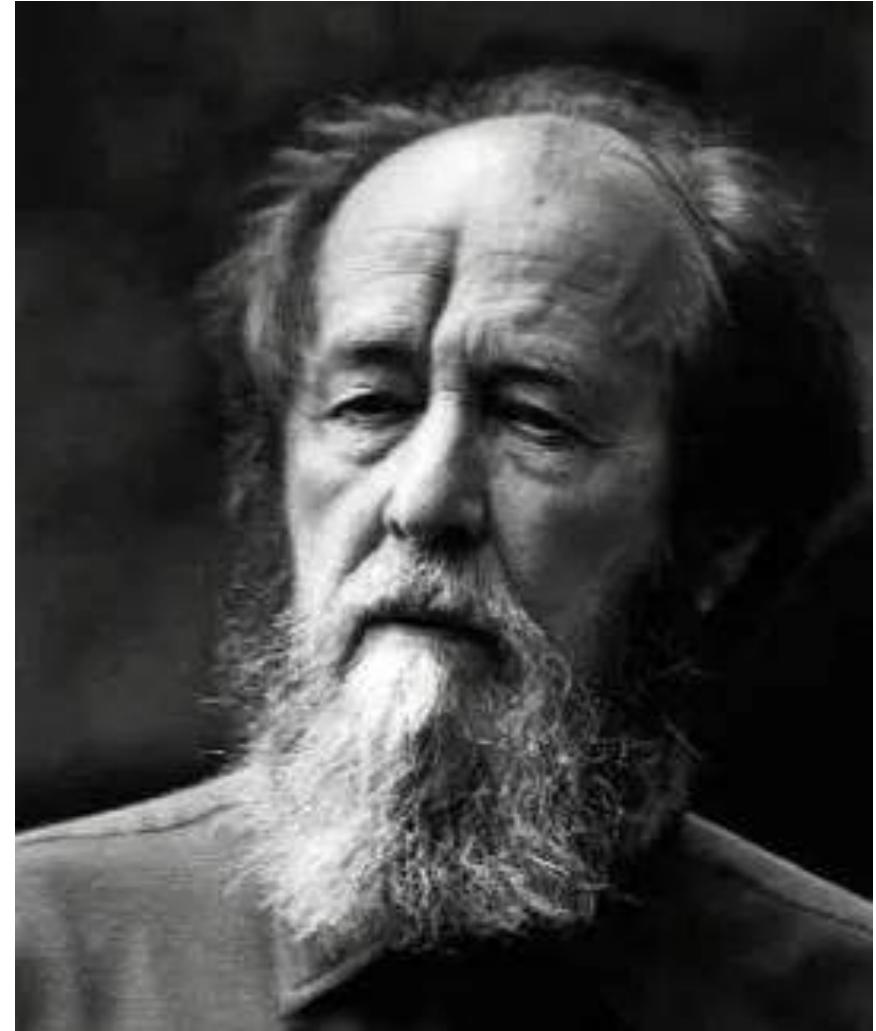
新潮文庫

# A・ソルジェニーツィン

1918～2008 ソビエト連邦の小説家。スターリン批判をして、**強制収容所**で約10年間強制労働をした。その経験を作品化する。

1969年ノーベル文学賞

1974年国外追放されたが、ソビエト連邦崩壊後の1994年に帰国した。



# P213 「帝国主義と友情」

# E・M・フォースター イギリスの小説家1879～1970



長編小説。1924年発表。



Collected Works of E. M. Forster

E. M. フォースター 著作集 11

## 民主主義に万歳二唱 I

小野寺健 川本静子 共訳  
小池 滋 北條文緒

みすず書房

## フォースター 『民主主義に万歳二唱』

というわけで、民主主義には二度万歳をしよう。一度目は、多様性を許すからであり、二度目は批判を許すからである。ただし、二度で充分。三度も喝采することはない。（「私の信条」）

# フォースター「私の信条」1938年7月

私は、この主義というのが嫌いで、国家を裏切るか友を裏切ると迫られたときには、国家を裏切る勇気を持ちたいと思う。こんな選択をすれば現代の読者は憤慨して、即座にその愛国的な手を電話にのぼし、警察に通報するかもしれない。だが、ダンテなら驚かなかっただろう。ダンテはブルータスとキャシアスがローマという国を裏切るより友だちのシーザーを裏切ったというので、この二人を『神曲』の円環状になった地獄でも、最下層に置いたのだから。たしかに、これほど苦しい選択を迫られることはまずないだろう。それでもあらゆる信条の背後には、苛酷で容赦しない、それを奉じるものがいつかは苦しむ羽目に陥りかねないものが潜んでいるのであって、個人的人間関係という信条も、その優雅でやさしい響きにもかかわらず、苛酷な恐ろしいものを秘めているのである。一人の人間にたいする愛と誠実が、国家の要求と相いれないばあいがあるのだ。そうなったときには――国家を倒せ、と言いたいが、そうすれば自分が国家に倒されかねないのである。

# 「貨幣に還元される体制」

19世紀～20世紀

資本主義の問題点（資本家による搾取）が指摘された時代でもあった

→社会主義 共産主義 ファシズムの台頭

# 友情について

キケロー 著

中務哲郎 訳



キケロー（紀元前106  
～紀元前43）

共和制ローマ末期の  
政治家、思想家、文  
筆家

われわれ人間は、あらゆる人のあいだに、それぞれの関係性が近いものであればあるほど、それだけ強い、ある種の共同体的結びつきが存在するように生まれついているのだ、と。異国人より同胞市民のほうが、赤の他人より親類縁者のほうが好ましいのは、それゆえなのである。いかにも、そうした関係性をもつ人々とともに、それにとまなう親愛の情を生んだのは、ほかならぬ自然なのだ。だが、その親愛の情には十分な強固さが欠けている。なぜなら、親近性からは善意を取り去ることができるが、友情からはそれができないという点で、友情は親近性にまさるからである。実際、善意を取り去れば友情の名は奪われるが、親近性は善意を取り去っても依然として残る。

# アラン 定義集

神谷幹夫訳



青 656-4  
岩波文庫

愛他主義：これはエゴイズムの反対である。これは他の人たち（autrui=「他者」）のことを思う性格、彼らが何を思っているか、何を感じているか、何を希望しているか、何を欲しているか、何を欲するはずであるか、何を我慢することができないか、などを考える性格である。これは他人の位置に自分を置くことである。したがって、彼らが表明する、あるいは彼らが表明すると想定される讃嘆や非難によって強く影響される。この種の友情なしには、世界には社会というものはまったく存在しない。

# 第二段落

二十世紀の時代経験としての友情は、どのようななかたちで成立し、どのような場所を支えるものとしてあったのか？

〔新装版〕

# オーウェル評論集

George Orwell

象を撃つ

ジョージ・オーウェル  
川端康雄編



平凡社

## スペイン回顧録

[https://drive.google.com/file/d/13LuwX09yphGDcfC8O6JtdVFdLwTsp09e/view?usp=drive\\_link](https://drive.google.com/file/d/13LuwX09yphGDcfC8O6JtdVFdLwTsp09e/view?usp=drive_link)

オーウェル自身がスペイン内戦に人民戦線側の義勇兵として従軍した体験を描いたもので、フランコ将軍指揮下の反乱軍（ファシスト軍）との戦いの模様などが書かれている。



スーザン・ソントグ＝著

曾啓次郎＋波戸岡景太＝訳

Styles of Radical Will  
Susan Sontag

河出書房新社

# ハノイへの旅

[https://drive.google.com/file/d/1wayEQMhCZJueSlfpkFBMcYw3PrXtKSK/view?usp=drive\\_link](https://drive.google.com/file/d/1wayEQMhCZJueSlfpkFBMcYw3PrXtKSK/view?usp=drive_link)

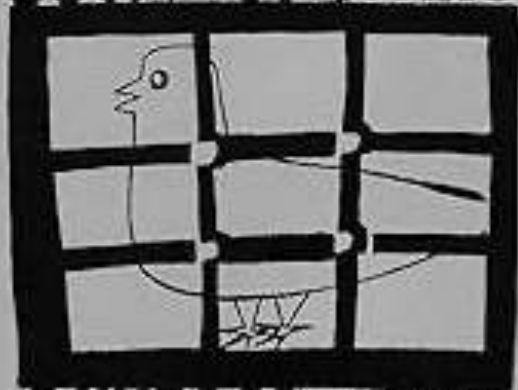
アメリカ人であるソントグが、ベトナム戦争下のハノイを訪問した回想録

# 戦車と自由

チェコスロバキア事件資料集

I

**SOCIALISMUS ANO**



**OKUPACE NE!!!**

みすず書房

## 「二千語宣言」

国民の大半は希望を持って社会主義のプログラムを受け入れた。しかしその運営は正しくない人々の手に陥ちた。～略～誤った指導路線のために、党は政党およびイデオロギー共同体から権力機構に変質し、この権力機構は権力欲の強い利己主義者、打算的な小心者、心にやましさを持つ人々にとって大きな魅力となった。こうした類いの人間が流れ込んできたことは、党の性格と行動に影響を及ぼした。党内部は誠実な人々が恥ずべき事件（訳註一肅清のこと）を起こすことなくして、影響力を増すことのできる状況にはなかった。～略～さらに悪いことには、われわれ自身がもうお互いに信じあうことができなくなっていた。個人と集団の名誉は地に落ちた。誠実さは通用せず、能力に応じた人間の評価などについては語るもムダである。